

## 菟道稚郎子尊 宇治墓外構柵その他整備工事に伴う調査

京都府宇治市菟道丸山に所在する応神天皇皇太子菟道稚郎子尊宇治墓は、現状で墳丘部の全長約80mを計る前方後円墳であり、周囲に壕をめぐらせている。現在地に決定されたのは明治22年（1889）のことである。当時は茶畑であり、「前方後圓の形態歴然として存し」ていたことが知られている。翌年、兆域を定め、周隍を掘削、前方部を拡張し、また陪冢（い号）を修補している。施工時には、周壕は明確でなかったが、この時の工事により、周囲が掘削され、その土を利用し、周囲の土堤や拝所・参道が造成されている。その際、前方部から多くの「土器」が出土したことが知られているものの、詳細な内容やその後の所在は明確ではない<sup>(1)</sup>。

今回、本墓において、外構柵その他整備工事をおこなうことになった。工期は平成21年12月1日から翌22年3月17日であり、その間の掘削については、当該監区職員による立会調査をおこなうとともに、平成21年12月15日から18日には、本部職員による立会調査を実施した。

本部職員による立会調査をおこなった箇所は、参道西端の拝所入口部の出入口スロープ新設工事箇所（第32図）であり、最深で約1.7m掘削した。地表下約1.3mまでは、盛土であり、その下が地山（粘質土）であったが、遺構等は認められなかった。この地山の検出レベルは、南側道路造成時の地表面レベルとほぼ同じであった。遺物は、盛土中から江戸時代後期の磁器碗の小片が1片出土している。その他、外構柵（角パイプ柵）取設、参道舗装整備や鉄扉改修などに伴う掘削に立ち会ったが、そのほとんどは造成時の盛土と考えられた。

現在の参道や拝所は、周辺部より一段と高くなっている。明治期の整備時に盛り土された部分であることが、今回の調査でも確認されたこととなろう。なお、近隣開発に伴い、「宇治川太閤堤跡」が確認され、関連する遺構等が宇治墓付近に及ぶ可能性もあり、注意深く立ち会い、地元宇治市や京都府教育委員会にも来墓してもらったが、関連する遺構は確認できなかった。（福尾正彦）

註

(1) 『宇治墓の沿革』（陵墓課保管歴史的資料、1023/C3）。